

大切なことばかけ



八百津町教育委員会

今、町内のどの学校でも「ぼかぼかことば」「ふわふわことば」あるいは「ちくちくことば」「ことばの名人」「ことばの達人」というように、言葉に対する感性を養う取り組みを実践しています。

随分、前の話になりますが、他県の幼稚園を参観した際のことです。ちょうど年長児の「折り紙」の授業でした。可愛い女の子2人と、男の子1人のグループが鶴を折っていました。男の子はうまく折ることができず、四苦八苦していました。するとグループの女の子が、小声で「この子は、いつもこうなんだよ。」と言いました。もう1人の女の子は、黙って見ていましたが、授業が終わりに近づいた頃、そっと手を伸ばし、男の子の鶴を完成させ「はい、これで大丈夫。」と小声で言いました。何げない場面でしたが、こんなことが考えられました。1人の女の子は、普段から、まわりの大人に「あなたは、いつもこうなんだから。」という否定的なことばをかけられているのではないかと。また、もう1人の女の子は、困った時に、まわりの大人がさりげなく手助けし「うまくできたねえ。」と、温かく勇気づけられて育ってきたのではないかと。授業後、先生に尋ねると、思った通りでした。あらためて、私たち大人が子どもにかけ「ことばの大切さ」を教えられたような気がしました。

ふと、「青少年育成県民会議」の冊子にある「子どもたちはこうして生き方を学びます」の一節を思い出しました。

- 批判ばかり受けて育った子は、非難ばかりします。
- 敵意の中で育った子は、誰とでも戦います。
(中略)
- 人に認めてもらえる中で育った子は、自分を大事にします。
- 仲間の愛の中で育った子は、世界に愛を見つめます。

私たちは、毎日、いろいろなかわりを通して、子どもとともに生活しています。その中から、子どもたちはたくさんのことばや、生き方を学んでいます。

しかし、私たち大人は、そのかわりの中で、子どもたちにかけることばがパターン化されていることが多く、決まり文句があることも事実です。たとえば「がんばれ、がんばれ。」「はやく、はやく。」「だめ、だめ。」と言ったことばです。どちらかと言えば、

即応的でネガティブなことばかけが多く、子どもたちとのことばの交流へ発展しません。

ここでは、子どもたちの心に届き、会話につながるようにするために大切にしたいことを挙げます。

1 子どもたちの感情を、封印しないようにしましょう。

たとえば、「今日のおかずはまずいなあ。」と子どもが言ったら、「なんや、その言い方は。」と、高圧的な言葉ではなく、まず、子どものことばを受けとめてから、「あら、おいしくなかったの。」と、そのまま返し、次の言葉を待ちたいものです。

2 子どもたちの感情を、丁寧に言語化してあげましょう。

たとえば、「くやしかったんだね。」「つらかったんだね。」と共感的に子どもの気持ちをことばにしなから「でも、お母さんは、それでいいと思うよ。」「お父さんは、そこまでよくやったと思うよ。」と、勇気づけてあげたいものです。

3 兄弟姉妹の比較をしないようにしましょう。

たとえば、「お兄ちゃんばかり。」「どうせ私なんか。」ということばが出た時は、気をつけたいものです。それをすぐに否定しないで「どこでそう思ったの。」「そんな風に感じたの。」と返してあげたいものです。

4 まず「どうしたの。」と聞いてあげましょう。

たとえば、「元気ないねえ。どうしたの。」「疲れた顔してるねえ。どうしたの。」と、心配している心を届けて、次の言葉を待ちたいものです。

このように、生活の何気ない場面で、たくさん「勇気づけ」のことばをかけ、子どもたちとの会話をいっぱい紡いでみましょう。



おかあさんの「やさしいことばかけ」